

82. 「照星閣」と「夜の星」

問 榴岡天満宮を「照星閣」というのは何故か、また、その境内の「夜の星」を、「梅」とするものと、「桜」とするものと、本によってまちまちである、どちらが正しいのか。

答 天満宮の祭神菅原道真は、平安朝前期における第一級の大学者でしたが、宇多・醍醐2帝の絶大な信任を受け、右大臣の栄職に昇ったため、讒言に会い太宰府に左遷され、悲運な最期をとげた人物でした。しかし、その卓抜な学徳と、忠直な人格とが後世多くの人々の尊崇を受け、延喜5年〔905〕太宰府天満宮として神に祀られ、天慶5年〔945〕京都北野に天満宮として祀られたのでした。以後、道真は学問の神として信仰を集め、この天神信仰は忽ち全国的に広まり、各地に分神が祀られ、今では1万社を越えるまでになっているといわれます。榴岡天満宮もその一つで、創祀は古く、天延2年〔974〕といわれ、宇多郡八幡崎・柴田郡川内邑・国分小田原邑・旧天神を経て、寛文7年〔1667〕、第4代伊達綱村が、現在地を選んで遷座し、今日に至ったものであります。その社殿に「照星閣」の扁額を掲げたので「照星閣」と号せられ、「夜の星」と称する古梅を旧地から移し植えたと伝えられています。「夜の星」とは、桜ではなく、「梅」なのであります。幼時からすぐれた文才の持主であった道真の、12歳の時の作に、

月耀如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡転 庭上玉芳馨

の漢詩があります。

これが、「照星閣」と「夜の星」との典拠であります。およそ事の真否を究めようとする場合、最も根源的な原点資料に遡らねばならないことの、これは、実にその1例なのであります。

「梅」は、中国原産で、わが国には奈良時代頃入ってきました。当時の先進的文化国家中国から渡来した「梅」は、貴族上流階級にこの上なく珍重され、その邸には不可欠な庭木とされる程、もてはやされたものでした。「万葉集」でも、最多「はぎ」の歌138首に次いで、「梅」の歌が114首を数え、また、皇居「紫宸殿」〔ししいでん。ししんでん〕の左近の桜も、「梅」であった時代があったのです。康平5年〔1062〕前九年の役の捕虜安倍宗任に、大宮人が「梅」を示して、何の花かと尋ねた時『わが国の梅の花とは見たれども大宮人はいかがいふらむ』と答えたという逸話は、みちのくには梅の花などあるまいと侮った大宮人の傲りであったが、裏返せば都でも、当時なお、ありふれた木ではなかった事実を示しています。このような時代に、「梅」を愛した道真は、流石先端的な文化人であったことを示すものであります。道真が、太宰府に左遷されて家を出る時『東風〔ちち〕吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな』と詠んだ梅の木が、道真の配所筑紫〔つくし〕まで飛んで、その庭に生え匂ったという「飛梅」の故事など、余りにも有名であります。

このようなことから、天神信仰と「梅」とは切り離せないものとなっており、その故に、榴岡天満

宮の「照星閣」の称号があり、「夜の星」と名付けた「梅」があったのであります。

なお、「照星閣」や「夜の星は梅である」ことに言及している諸書の要所を記して置きます。

1. 「封内名蹟志」⁽⁸⁾ 卷7 (佐藤信要)

『菅神廟〔びょう〕⁽⁹⁾

祀菅垂相。往時在宇田郡八幡崎。天延二年〔974〕平持村所勸請〔かんじょう〕。文永元年

〔1265〕。島津氏移于国分莊小田原村玉手崎。天文十三年〔1544〕石參河守宗明再興之。慶安三年〔1650〕会東照宮經營之事。而移地于東林。寛文七年〔1667〕。綱宗〔村の誤り〕君遷于榴岡而新造替。爾後多年所植梅樹数百根。春初薰十里香風。』

2. 「仙台金石志」⁽¹⁰⁾ 卷之12 (吉田友好)⁽¹¹⁾

『**照星閣** 元禄八年歳〔1695〕

六月二十五日

不尤謹書

此額高橋謙庵^{名不尤}翁之所献也。翁学書于今大路道三法印^{翁学医従事}而尽得其伝。崇仰菅廟。^{称道求}法印六年。

晚書此三大字。於梅花似^{於梅花似}照星之句。今我先人^{名兼猶称小兵衛}鑄刻〔せんこく。彫る〕之榜〔ぼう。かかげ〕^{師翁而得其筆跡}

躑躅岡之神廟。後有故廢置者殆六十年。予恨先人之製埋没。翁之志願亦不遂矣。於是乎請之別当恕應。更加修飾。而懸廟宇永伝云。

宝曆二壬申〔みずのえさる〕歳六月〔1762〕 高野兵藏兼良謹誌 』

『躑躅岡照星閣碑

菅公御遺訓 〔略〕

天明七丁未〔ひのとひつじ〕 六月二十五日

新沼敬父 建

東溟井民和書 』

3. 「仙台の社寺と教会」(「仙台市史」第7巻の内。山本 晃)

『天神社(躑躅岡) 〔前略〕その後綱村积迦堂経始に当り新に神殿・拜殿・楼門・神饌所・神楽殿・華表〔とりい〕等を建て結構莊嚴、輪奐〔りんかん〕の美を極め、神器一切備わらざる無く、扁〔へん〕して「照星閣」と称した。〔後略〕』

4. 「仙台」(小倉 博。大正13年版)⁽¹²⁾

『天神社 今榴岡神社といふ。藤原基衡の時代から小田原玉手崎にあって歴代の領主の崇敬を受けていたが、忠宗の東照宮を造営するに当って之を東林に移し、寛文7年に至って綱村社地を榴が岡に卜し、新に本社・楼門・拜殿・御供所・華表等を経営して光善院を別当とし、夜の星と称する枝垂梅を玉手崎から移植し、祭日を6月25日とする。明治4年村社となる。』

5. 「榴が岡をめぐる人たち」(分水山人)

『…夜の星といわれる枝垂梅を玉手崎から移植し扁額を掲げ、社殿を「照星閣」と称した。』

以上の所説に反し、「夜の星」を桜と誤り記すものに、次の諸書があるので、注意が肝要です。

1. 「封内風土記」巻之1（田辺希文）
(13)

『天神宮』

〔前略〕楼門西有号夜星垂糸古桜。自玉手崎旧地。移栽之。〔後略〕』

古典的な権威をもつこの書の一失が、後続の諸書に孫引きの誤りを伝えてしまったものようです。

2. 「仙台市史」（明治41年版）

『躑躅岡天満宮』

藤原基衡の臣佐藤治信国分の荘を領す。其子基春の瑞夢に感じ天満宮を柴田郡川崎より国分小田原
玉手崎（東照宮の左）に遷せり。……忠宗君慶安中東林（旧天神の地）に移し綱宗〔村〕君寛文七
年今の地に移す。夜の星と称する垂糸古桜も亦移す。』

3. 「宮城野」（斎 洛花。大正3）

『城東天満宮』

〔前略〕古記に従えば、構門の西に「夜の星」と称する垂糸桜あり、元と玉手崎の旧地にありしを移
し植えたりと伝へ、万葉の垂糸、照々たる花葩を着け、宛ら夜間蒼穹に閃く星華に似たりと称せら
れしが、〔下略〕』

注(1) p. 498 「143 天満宮の榴岡への移遷について」参照。

注(2) 承和12年〔845〕生。平安前期の学者、政治家。是善の子。宇多天皇に仕えて信任を受け、
寛平6年〔894〕遣唐使に任せられたが、その廃止を建議。醍醐天皇の時、右大臣となった
が、延喜元年〔901〕藤原時平の讒〔ざん〕により大宰権帥〔だざいのごんのそつ〕に左遷
され、延喜3年〔903〕配所に歿。書をよくし、三聖〔空海・道真・小野道風〕の一。「類
聚国史」を編し、「三代実録」の撰に参与。詩文は「菅家文章」・「菅家後集」に所収。死
後天満宮に祀られ、学問の神として尊崇される。菅公〔かんこう〕・菅丞相〔かんしょうじ
ょう〕・菅家〔かんけ〕。

注(3) 令制の官庁、筑前国筑紫郡に置かれ、九州及び壱岐・対島二島を管轄し、兼ねて外寇を防ぎ、
外交のことを掌った。長官を帥〔そつ〕、その下に権帥・大貳・少貳・大監・少監・大典・
少典などを置いた。福岡市の南東16kmの水城村観音寺に遺跡がある。おおみこもちのつか
さ。

注(4) p. 71 の注(3)参照。

注(5) 好文木・清友・清客・君子香等の文芸用雅名がある。「うめ」は梅の漢字音を日本的に読ん
だもので、「万葉集」には、宇米・有米・烏梅などと宛て字してある。賀茂真淵の説では、
「烏梅」の字音のようである。烏梅は当時薬用として輸入された「ふすべうめ」で、梅の実
の燻製品であった。梅が中国から渡来してから、わが国で「花」といえば、梅花をさした。

注(6) p. 195の注(8)参照。

注(7) 平安京内裏〔だいり〕の正殿。もと朝賀・公事〔くじ〕を行う所であったが、大極殿〔だいくくでん〕の類廃後は即位などの大礼を行なった。南面して設けられ、九間の母屋の四方に廂〔ひさし〕があり、殿の中央やや北寄りに玉座を設け、その東に御帳台〔みちょうだい〕、北に賢聖障子〔けんじょうのそうじ〕がある。北廂から廊で清涼殿に通じ、南廂に階〔きざはし〕があって前庭に通ずる。階の左右に左近〔さこん〕の桜・右近〔うこん〕の橘がある。今の京都御所のは安政2年〔1855〕の造営。南殿〔なでん〕・前殿・正殿。

注(8) p. 403の注(4)参照。

注(9) p. 402の注(2)参照。

注(10) 本編28巻、附録4巻、補遺〔未定稿〕1巻、収録419項、実に空前絶後の功業と評価され、金石志の一大成書として、研究者に裨益するところきわめて大きい。天保13年〔1842〕から安政4年〔1857〕まで、実に16年の歳月をかけての精査に成る大著でありながら、序跋も凡例もなく、敢て世に問おうとしなかった学究一途の謙虚さがうかがわれる。昭和2年「仙台叢書」別刊の中の2冊本として、活字化公刊された。

注(11) 「仙台風藻」(今泉篁洲)に、

『通称丈太夫。養賢堂指南役。元治二年〔1865〕乙丑〔きのとうし〕三月八日歿。葬仙台八塚大林寺。』

「仙台人名大辞書」(菊田定郷)に、

『ヨシダトモヨシ

儒者。通称丈太夫、幼より経史を学びて造詣最も深く、養賢堂指南役を命ぜらる、その編輯するところの「仙台金石志」二十巻〔?〕は数十年の苦心によりて成るもの、藩府に納れて賞賜あり、後年仙台叢書刊行会之を刊行す、元治二年三月八日歿す、享年五十五、仙台新寺小路大林寺に葬る。』とある。

注(12) p. 52の注(7)参照。

注(13) p. 58の注(1)参照。

資料 菅原道真(坂本太郎)

仙台金石志(吉田友好。「仙台叢書」別刊)

83. 「うぐい田」とは

問 「うぐい田」とは、何処にあって、また、どうしてこのように呼ばれるのですか。